ねむの里　田んぼ活動の手引き

天野　三男

はじめに

ねむの里には、毎年米作りにたくさんの人が来られ、楽しく田んぼ活動を行っています。とりわけ小さな子供たちが畔で駆け回る姿は田んぼの風景にふさわしく心が浮き立ちます。初めて親子で田植えや稲刈りの体験をする方も毎年来られるので、一年間の田んぼ活動の流れや作業の手順、ねむの里の概要をあらかじめ知っておくと便利ではないかと考え、小冊子を計画しました。

米作りの経験は、長いわりには研究不熱心で、米作りそのものの専門家ではありませんが、ねむの里の活動については、日頃から楽しんでいる一人ですので、参考になることもあると考えています。

１．米作り作業の一年間の流れ

米作りの一年間の流れは、主なものを挙げれば以下の通りです。

① 落ち葉入れ（12 月から２月）
② 田起こし（1 月から３月）
③ 育苗（4 月）
④ 草刈り
⑤ くろぬり（4 月から５月）
⑥ 代掻き（5 月）
⑦ 田植え（6 月）
⑧ 田の草とり（6 月から７月）
⑨ 稲刈り（10 月）
⑩ 脱穀・籾摺り（11 月）

２．各作業の説明

① 田んぼへ落ち葉入れ（12 月から２月）

山の落ち葉を田んぼに入れます。山で下草を刈り、落ち葉を掻きやすくして、背負い籠で運びます。田んぼに入れる量は、多ければ多いほど良いのですが、一例で言えば、さんさん三角田に最低、籠で５杯が目安となります。
落ち葉を入れる理由は、有機肥料の投入と田んぼの土質を良好に保つためです。化学肥料のみを使い続けると、土が固く悪くなるとされています。

背負い籠は、落ち葉を運ぶのに便利です。籠が壊れない範囲で、落ち葉を籠の中に踏み込むと相当量の落ち葉を入れることができます。落ち葉を集めるには、熊手を使います。籠の縁は竹で編んでありますので、落ち葉を留める役割があり、かなり詰めることができます。日大三高の隣の山林には、ふんだんの落ち葉があり、そこからトラックで運んでいます（1 回あたり 4 杯程度)。落ち葉は湿っているとかなりの重量があり、運ぶのは相当な重労働ですので、加減が必要かも知れません。
田んぼへの落ち葉入れが田んぼ農作業の始めと考えています。

※冬、山の下草を刈り、熊手で、落ち葉を掻くと、土が露わになったところに野鳥のキビタキがよく来ます。近くで虫を食べ、あまり逃げません。北側の斜面では、竜のひげが自生していて、青い実をつけ、目を引きます。

② 田起こし（１月から３月）

４本鍬で、田んぼの土を掘り起こします。「天地返し」とも言って土の塊をひっくり返す作業です。通常は、冬の作業になります。耕運機を使用してもよいのですが、ねむの里の場合 1 年中、山から水が浸み出ているので、田んぼの内側の周囲に溝を作り、水を流して田んぼを乾かさないと、かなりの部分で耕運機が泥にはまり使用できなくなりますので、こうした手作業になります。前年に植えた稲の株が完全にひっくり返っていることが目安となります。４本鍬を軽く持って振りかぶり、土に打つようにおろし、体重で手前に引くと、楽に起こせます。田起こしをすると、田んぼの生気がみなぎるようで気持ちのよいものです。
本格的な農家は、冬の早い時期に田起こしをやっています。田んぼに空気を入れたり、害虫を少なくするためかも知れません。

③草刈り（４月、５月下旬、７月、９月）

田んぼの主だった作業の前に畔などの草刈りが必要です。畔の補修箇所の確認や、マムシ・防虫対策、作業能率をあげるために、おおむね４回程度の草刈りが必要です。
子供たちも、マムシの出る時期、草で見えない箇所は要注意です。
暑い日など、水口にマムシが体を冷やしているとよく言います。
また、草の中に、チクンと刺す虫がいます。３日ぐらい腫れることがあります。

ねむの里は、田んぼの畔に竹や雑木がないので、草刈り機のひも仕様で刈れます。ひも仕様は、機械をあまり振り回さないので、比較的楽に刈れますが、土を巻き上げますので、防護眼鏡が必須です。目に泥が入ると、治療が必要になる場合があります。周囲の山側の雑草は、雑木や竹の根があるので、草刈り機の刃で刈った方が良いでしょう。刃で刈る場合は、周囲の人に十分気を付ける必要があります。

※以前は、草刈り機の刃で、三枚刃があり、それで家の前の田んぼの畔を草刈りしていた時、畔にあった小石を刃が飛ばして目にあたりました。幸い眼鏡をしていたので、眼鏡が割れただけでしたが、大けがをするところでした。道など刈るときは、特に防護眼鏡は必要です。また、近くに車などが止まっているときは、草刈りをやめるほうがよいでしょう。防護フェンスを張らないと、車を石などで、傷つける場合があります。

④育苗

4 月中旬から下旬にかけて、種籾を苗床に撒きます。育苗箱を用意し、育苗用の紙を敷きます。そこにホーネン土を上から 5 ミリの深さを保ちながら敷いて平らにします（専用金具を使うと便利)。その上に種籾を箱 1 つにつき、180 ccずつまんべんなく撒きます。もち米（満月もち）2 キロで育苗箱 16 箱の勘定になります。
種が重ならないように撒いたら、その上にまたホーネン土を覆土として撒き、種が見えないよう被せます。その後、じょうろで水を十分にかけます。水は、育苗箱から染み出てくるまでかけます。
4 月中旬ですと、遅霜が降りたりするので、ビニールをかけます。水は、育苗箱が乾かないよう、朝晩 2 回は水やりが必要です。昔は、田んぼに苗床をつくり苗を育てましたが、管理のしやすさ、苗とりが不必要などの理由から、育苗箱で育てています。近くの恵泉女子大学では、田んぼでの苗代で栽培をしています。

※苗代は、小さな田んぼを作る要領で、水の管理ができる場所を選びます。周囲に水の導入路の溝を作り常に湿った状態にします。土をよくこねて平らにし苗床をつくり、その上に種を撒きます。苗床に、菜の花を敷くと苗とりの時に取りやすい効果があるとされています。ねむの里では、以前三角田の山側に作ったことがあります。

⑤畔塗り（くろぬり）

田んぼに水を溜めるために内側の畔を土で塗り固める作業です。代わりに畔シートを敷くというやり方もありますが、ねむの里の田んぼの規模では、神代の時代から続く「くろぬり」の方が簡単で、合理的です。
作業は、2 段階あり、まず、鍬で、畔の内側を縦に削ります。内側の草の根などを切り、下に土

を落とします。（前年に塗った土を削り落とす要領です。また、削った断面に穴があいていたり、カエルの卵が産みつけられている場合があるので、注意します。）この作業が終わったら、畔に沿って、水を導入し、耕運機で土をこねます。（耕運機は、代掻き用の車輪を付けて水と土が混ざるよう運転します。）こねた土を鍬で、掬うようにして、畔の内側に塗り付けます。この時土を鍬の外側で、強くたたいて塗り付けるのが肝要です。
クロ塗りをすると、驚くほど水が溜まります。ねむの里の場合、川の水ではなく、山のしぼれ水での稲作ですので、雨水（天水）が頼りです。
田植えは６月上旬とすると、４月、５月の雨水の管理がポイントになります。５月は、雨が少ないことが多いので、４月の雨を如何にストックするかが、田植えの成否の鍵です。水源に近い田んぼの早目のくろぬりが必要な所以です。

※クロヌリをするときは、腰に負担がかかるので、腰ベルトをしておくとよいでしょう。泥田の仕事は、ぎっくり腰になる人が多いので、要注意です。

※三角田の畔には、大きなねむの木が生えています。畔に大きな木があると、くろぬりがしにくく、根の隙間から水がもれ、よくありませんし、日陰になるので、稲にも悪いのですが、ねむの里のシンボルですので、切るわけにはいきません。以前、活動場所の畔には、さらに大きな枝ぶりのよいねむの木がありましたが、台風で痛められ、幹が腐って伐採せざるを得なくなりました。ですから、残ったねむの木は貴重です。三角田のねむの木も一度、台風の風で倒れ、根についた畔の土が大きく盛り上がりました。大勢のさんさんのメンバーによってロープで持ち上げ、元にもどしました。現在この木についているロープはその時の名残です。

⑥代掻き・エブリかけ

くろぬりした後、田んぼに水を導入し、代掻きをします。小型耕運機に代掻き用の車輪を付け、田んぼ全体をぐるぐるかき回します。昔、ねむの里で稲作をしていた古老の方のお話によると、馬を使って代掻きをしたと聞いています。ねむの里の田んぼは、かなりの部分が泥田ですので、耕運機をロープで引っ張ってもらうことも必要です。小型の耕運機を使用するのは、万一耕運機が泥田にはまったとき、二人位で取り出せるからです。三角田は、比較的代掻きしやすい方ですが、三角田右の上の田の手前は、深くて代掻きはしないで済ませています。
代掻きしたあと、エブリで土を平らにします。土が平らでないと苗が植えにくくなります。えてして、田んぼには、高低差があって水が均等に被っていない状態にあります。エブリかけの時に水の力を利用して、できるだけ田んぼを平らにし、まんべんなく水が行き渡るようにします。
代掻きの際、通常、有機肥料として牛ふんを投入し、土に混ぜます。三角田に５袋、右上田に４

袋程度です。

※ねむの里での田んぼ活動は、それぞれの田んぼで、各自、自由に責任をもって米作りをするのが建前ですが、谷戸の泥田の宿命から、代掻きを一人でやるのは困難です。小型の耕運機でも、泥の中にはまり込む確率は極めて高いので、協力が必要です。耕運機の運転も、ロープで引っ張る役も力がいるので、へとへとになり、交代が必要です。
田んぼ活動協力の原点と言えるでしょう。

⑦田植え

代掻きが終了すると、田植えができます。育苗箱の苗を片手でつかめる分量で抜き取り、親指と人さし指で、3 から 4 本の苗を摘み、指先を土の中に差し込むように植えます。土の中に深く植える必要はなく、苗の根が土に絡めば大丈夫です。その際、根が切れていないことに注意します。植え方は様々ですが、大勢で植える場合は、ひもの線を張って、掛け声をかけて植えます。縦横どちらか一方は必ず直線になるよう植えてください。間隔は、25 センチから 30 センチです。間隔が正しくないと、後で、田の草を取るとき大変です。スムーズに田んぼの中を歩けることが大切です。田植えをしやすくするためには、田んぼから水を引いた方が植えやすくなります。水が多いと苗が水没したり、穴があいていると植えられないことがあり、非能率です。ねむの里のような谷戸の田んぼの水は貴重ですが、思い切って抜くことが大切です。6 月の田植えにこぎつければ、たいていその後雨が降ることになっています。

田植えが終了したら、化学肥料を投入します。888 か 14、14、14 の化成肥料で、数字は、窒素、リン酸、カリの割合です。2 つの田んぼで、20 キロ撒きます。

※いつだったか、図師町の谷戸の田んぼを見に行った時、篤農家の知り合いがクロヌリをしていたので、色々な話をしました。その中で、近所の小学生の集団田植え体験の話題で、「あれは墓参りに線香をあげているようなもんだナ」と言われて、面白い表現だと思いました。一日の田植え体験、稲刈り体験は、全体の農作業からすると、お彼岸、お盆の墓参り程度の事という意味です。ねむの里の田んぼ活動は、これには当てはまりません。

⑧田の草とり

稲は 10 日前後で活着し、2 週間たつと、田の草が生え始めます。6 月初旬に田植えをすると、20 日前後に初期除草をします。これをしないと、活着したばかりの苗が草に負けてしまいますので必須です。また、初期除草は、作業としても草の量が少ないので、2 時間もあれば、ねむの里の各田んぼ 1 枚はできるでしょう。細かな草を手で掬い取って田んぼの外に捨てるか、土の中に押し込みます。手には使い捨てのビニール手袋をすると、田んぼの中の虫に刺されることがなく、また、除草の感覚がつかめます。また、田んぼには、田澁があって、手が薄黒くなり、洗ってもなかなか落ちません。その点でもビニール手袋は便利です。
さらに 10 日もすると、本格的な除草が必要となります。苗が成長を始め、茎の周りに雑草が目立つようになります。茎の周りを手でかきまわすように除草します。こうして茎にピッタリついた草をとり、苗に空気を入れる効果があります。この作業はかなりきつく、慣れていても、一人でやると 2 時間で 1 枚の田んぼの半分程度しかできないでしょう。
本百姓の方々が除草剤を使う気持ちが理解できます。田んぼでは、この 10 日後、さらにもう 1 回田の草を取らないと、大幅な減収になります。
さらに丁寧に 8 月初旬に最後の田の草を取る場合には、網のついた帽子で、顔、特に目を防御する必要があります。顔を伸びた稲の茎の間に突っ込むので、目を切る恐れがあります。2 回目の除草が終了した時、化成肥料の追肥をします。前回同様 20 キロが目安です。
この時期小さいイナゴが、だんだん大きくなるのがよくわかります。
ただ、手をこまねいているだけです。
また、通常、8 月 17 日以降、1 週間ほど稲の受粉の時期で、田んぼには入らないとされています。畔も歩かないといわれるほどです。振動で花粉が落ちてしまうからです。注意しましょう。

※ねむの里の水田雑草で、一番早く現れるのが、浮草です。三角田の上のもち米田は、毎年浮草で一杯になります。根への日光を遮るので、厄介ですが、どうにもならず、頻繁に田んぼに入り、かき混ぜるしか方法はありません。大雨がふると、流れて下の溝に山のように溜まります。低温の日が続くと、山側の日陰部分にアオミドロが発生し、これはさらに厄介です。とってもとってもきりがないですし、稲に絡みついてきます。現在発生する場所は限定されているのが救いです。初期除草でのおなじみは、コナギとオモダカです。除草でとる量のほとんどがこれになります。一番厄介なのは、ノビエで、稲そっくりの雑草です。三角田では、2019 年に大量発生し、取り切れず、減収の一因にもなりました。2020 年もその種が落ちて、かなり生えています。

※田んぼの初期除草の道具に田車があります。乳母車のような形で、先端が金属製の船になっており、薄い車輪が両側についています。これを植えた稲の間を押しながら、からからと前に進みます。車輪で土を掻きまわし草を土にねじ込んだり、水が多い場合は、浮かせたりします。これは操作も面白く、効果的なので、今後ねむの里で導入したいところです。ただし、田植えの際、稲の間隔が真っ直ぐでないと使えません。また、稲の縦の間の雑草は残るので、そこは取らなければなりません。最近、近所で軽いステンレス製の田車を使用している光景を見かけました。ちなみに我が家の 2 台の田車は壊れて見る影もなくボロボロです。

⑨稲刈り

10 月も過ぎると稲刈りです。例年 10 月 10 日前後に実施しています。稲刈りのタイミングは、台風で倒れた稲はないか、稲の登熟具合はどうかなどを考慮して、天気と実施可能日を見ながら決定します。遅すぎるとイナゴに食べられる量が多くなります。

稲刈りは、人手が多ければ楽になります。稲刈りは刈り取りと束ね、そしてはざかけの 3 つの作業があります。はざかけは、以前近くの竹を切って馬をつくり、そこに掛けていましたが、昨年から、便利な金属製の三脚と横棒を導入しました。

稲刈り組は、まず畔近くの稲を刈るのがいいでしょう。これを袖刈りといいます。ねむの里の田は、刈り取り時でも、泥田の状態で、刈った稲をその場所に置けません。大勢いれば手渡しで畔に運ぶか、一輪車を田んぼに入れてその上に置くかです。能率よく刈るためには、その手順、手配が必要です。稲を刈る際には、必ず軍手をして、刈る稲束を片手でつかんで、刈り取り鎌で、茎の下の方を刈り取ります。畔には、稲の穂を決まった方向にして、あまり積み過ぎないことが肝要です。畔では、束ね組が稲を束ねますので、束ねやすく稲を置くことが肝要です。束ねる太さは、両手の親指と中指で丸をつくった太さです。太すぎると脱穀の際、機械にかかりにくいことと、束がほぐれやすくなります。束ねるには、昨年の藁を使います。藁を 3 から 4 本とり、刈った稲にぐるりと巻き、両端を交差させ、余った茎の部分を輪の中に差し込みます。稲わらは、摩擦が大きいので、十分しまります。ただ、親指で差し込むので、その指が痛くなります。そのために、木製の差込具を作りましたので、束ね組は使ってください。束ねがある程度進むと、はざかけ組の出番です。天日干しをする場所をあらかじめ決めて、まず三脚を立てます。横棒を掛けるので、かけ鍵が同じ方向になるよう調整します。そして三脚の中央をまず決めて足で踏み込みます。あとは他の 2 本の足を調整して立てます。その後横棒を連結しながら伸ばしていきます。横棒はお互いにはまるようになっているので、左右微妙に太さが異なります。稲架ができたら、稲束を半分に分けて、順次隙間のないようにかけていきます、稲束は、ねじるように分けると調子よくいきます。かけ終わったら鳥などの用心のため、周囲に網を掛けます。

※ねむの里では、大小 10 枚前後の田んぼに、もち米とうるち米の 2 種類が植えられています。大方下の方がもち米、上段の方の田んぼにうるちが植わっています。田植えや稲刈りの時に、もち米とうるちが混ざらないように注意が必要です。(混ざるとお餅がつけなくなります。) そこで、刈り取った稲架や稲束に印をつけたりして区別しています。

⑩脱穀・籾摺り

稲の天日干しは、最低 2 週間で、通常は 3 週間ほどで脱穀します。
脱穀は、脱穀機にかけて穂から籾をおとします。稲束を一つずつ機械の入り口に押し当てていきます。機械の操作は、回転部分が危険なので、注意しながら稲束を送ります。押し出た空の稲束は、来年使用するので、改めて 15 束に束ね、保管します。
籾摺りは、お米のもみ殻を取って、玄米にする作業です。小さな機械ですが、機械の操作塩梅があり、現在の機械では、一人付ききりで操作し、他の人がもみを機械の入り口に入れる作業があります。
本格農家は、現地に脱穀機を持っていき脱穀するのが常ですが、ねむの里は、搬入路が悪く、特に入口にかけた橋から脱穀機を落とすとどうにもならないので、町田市図師町の天野家で実施しています。そのため稲束を軽トラックで運搬する必要があります。稲束を 15 束ぐらいにまとめ運搬します。三角田等 2 枚の田んぼで、運搬機を含め 2 往復となります。事前に運んでおけば、脱穀、籾摺りを一遍にやることが可能ですが、そうでなければ、脱穀だけでその日は終了の可能性があります。
天野家の前には、現在駐車スペースがありますが、場合によっては、使えない場合もあり、その場合には、日大三高の隣の畑で脱穀を行い、畑の脇の道路に駐車することになります。その際にも、車の台数の事前把握が必要です。また、畑での脱穀の場合、籾摺りは、電気がないので、天野家に持ち帰ってすることになります。

※脱穀機は、農業機械の中でも進歩が著しいものがあります。千歯こき、足踏み脱穀機、モーターベルト脱穀機、モーター内蔵脇送り脱穀機（私の造語です。）と変化し、近代化の今では、刈り取りと脱穀を一緒にやるコンバインもあります。近所から古い脱穀機などを譲ってもらいながら、コンバイン以外は一通り使いました。千歯こきは、種を取る以外に、さすがに稲に使うには、手が痛くなりますが、大豆の殻をとるときなどは、威力を発揮します。脱穀機を含め、従来からの農業器具の工夫のすごさを改めて感じます。

３．農作業時の服装

田植え、田の草取り、稲刈り時の服装等は、以下の通りです。

帽子（顔が隠れる網がついたものが望ましい）
長袖のシャツ（すべて隠れるもの）
軍手、使い捨てビニール手袋を用意
田んぼ長靴又は田んぼ足袋（田んぼ長靴の方が脱げないし、足の保護になる。）
汚れても大丈夫なズボン（足がすべて隠れるもの）
小さな子の場合、田んぼ足袋がない場合、汚れてもよい厚手の靴下を何枚か用意する。（裸足は、避けて下さい。）手袋も忘れずに。
7 月下旬からの田の草とりには、防護眼鏡をかける。

※ねむの里は、泥田で、昔、馬を使ったと聞いていますので、田んぼの中に嫌気性細菌の破傷風菌がいるかも知れないと疑っています。そのため、足の防護に気を付けるとともに、傷をつけたら、すぐに消毒しましょう。（市販の消毒薬、オキシドール、絆創膏などを用意しておきます。）

※田んぼ長靴を履くとき、ビニール袋を足に付けて履くと便利です。田んぼ長靴は、履くとき、脱ぐ時が大変で、ビニール袋を足に被せておくと脱着が楽です。

※網つき帽子の効果は、絶大です。ねむの里は、虫が多いので、虫除けとともに、草刈りの時も、防護眼鏡とともに、眼の防護にもなります。

４．ねむの里のトイレについて

ねむの里のトイレは、コンポストトイレです、小屋は、頑丈に作ってありますが、天井脇に隙間があるので、虫や山の自然ゴミが侵入しています。使用前に快適に使用できるよう、箒、クイックルなどで掃除し確認して下さい。使用方法は、西洋式便座で、小便の場合、便座下の穴から外へホースで流れます。大便の場合、便座下にそのまま落ちますが、脇のハンドルを引くことにより、下のコンポストの中に落ちます。手前のハンドルをまわすことにより、コンポスト内の羽が回り、中の基材と一緒に攪拌されます。使用したトイレットペーパーは、コンポストの中に入れず、ゴミ箱に捨ててください。便座下の汚れが十分落ちない場合は、脇にある水とブラシで洗ってください。入口手前にあるバッテリーはソーラーパネルからの電源で、空気ファンの電源です。触らないでください。トイレットペーパーなどがなくなったら、責任者の方にご連絡下さい。夜使用する場合は、懐中電灯などを使用してください。
コンポストの基材は、年 1 回程度交換する予定です。

基材の中身は、ピートモス、バーミキュライト、もみ殻燻炭で、殺虫剤は使えません。（発酵によって、たい肥化するので、中の菌を殺さないため。）

5．ねむの里の物置

物置には、帝京大学の野外活動備品、ねむの里の農作業器具が入っています。農機具の使用は自由です。
扉の鍵がかかりにくくなっています。扉中央が下がっているためで、中央を上げ、左の戸につっかえ棒をセットしています。現状では何とかかかる状態になっています。ただし、左右の取っ手をあまり強く引っ張らないようお願いします。取手が外れます。

6．ドラム缶風呂

人の生活活動の基本は、食事とトイレとお風呂ではないでしょうか。
そこで、ねむの里でお風呂に入るためにドラム缶を用意しました。お湯を沸かすために、コンクリートブロックを置き、その上にドラム缶をセットし、下から薪で火をおこします。薪は、近くの山から集めますが、火をおこすには、枯れた竹を使うと便利です。竹は濡れていても、油を含んでいるのですぐ火がつきます。
ドラム缶は、180 リットルの容量ですので、20 リットルのポリタンクが 9 つ必要です。風呂の水は、水道水を使いたいので、トラックで 5 つずつ 2 回運ぶことになります。ドラム缶風呂は、小一時間で沸きますが、沸き始めると、熱くなるのが早いです。お湯をうめるための水を必ず用意します。また、ドラム缶に入るとき、入りやすい工夫が必要です。
踏み段や梯子など利用します。子どもが入るときは、傍で、支えが必要です。
課題としては、周囲から見えない工夫が必要ですが、今のところ名案がありません。

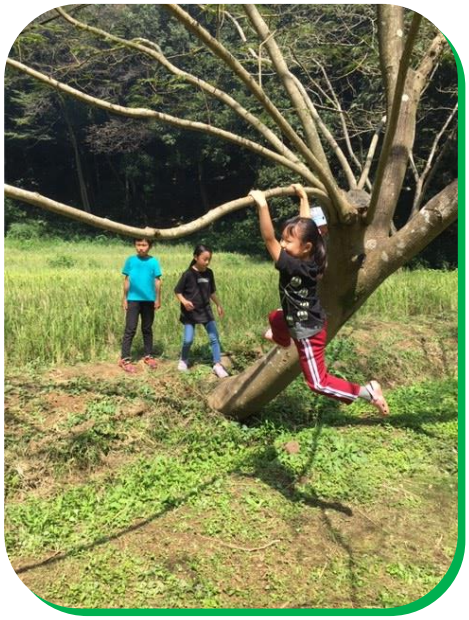
※山の中で竹を切るときは、注意が必要です。曲がった竹を切ると弾力で跳ね上がります。特に冬雪が被さったときは、かなり危険です。竹が割れると割れた箇所で頭などを切ることがあります。

7．水源の管理

谷戸の一番奥に水源があります。正面の杉の奥から染み出てくる水と左側の山から染み出てくる水があります。左側の山から流れでた土砂が堆積していたので、その土を利用して土嚢を作り、現在の水源を形成しました。土嚢を積んだ畔には、竹の根がたくさん残り、そこの隙間から、下の田んぼに流れています。水源の中にも竹の根があって、十分に掘り出してはいません。本来ならばもう少し水が溜まってもいいのですが、あまり深くなると、かえって危険なので、現状でよしとしています。雨水がこの水源を含め、下の田んぼに溜まればいいわけです。すぐ下の田んぼが今年第二水源の役割を果たしました。
今後畔の補修が必要な場合、左側山側から出てくる土砂を利用するといいでしょう。

※土嚢の作り方は、土嚢袋と金物のバケツの底をくりぬいたものを用意し、くりぬいたバケツの底を上にして、その上から土嚢袋を被せます。それをひっくり返して、シャベルで土をその中に入れます。あまり入れすぎると運ぶのが大変ですし、土嚢積みの形が上手にできないので 3 分の 2 程度にします。
バケツを使うと一人で土嚢が簡単にできます。

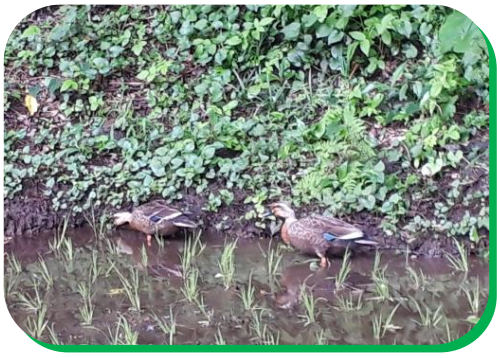
8．ねむの里の特徴的な植物



ねむの里の名の通り、ねむの木が 6 本あります。以前は大きな木がもっとたくさんありましたが、台風や樹齢により、現在の本数になっています。

水源に蓮がたくさんあります。大賀蓮で、町田市の大賀ぐうし館から苗を買って植えたものです。現在どんどん増えています。
のはな菖蒲が水源の近くに、菖蒲アヤメが右手山側にあります。のはな菖蒲は、昔からここにあるものです。山側の草花は、旧さんさん幼児園のものを株分けしたものです。
左手の山側にタラの芽が群生しています。現在増やしています。
活動場所奥の小田に、カラーが植わっています。
地蔵堂隣の山側に山椒の木が植わっています。
一番下、トイレ脇には、ミョウガ、ふきの群生場所があります。
活動場所奥、小田の前に、梅の木が 2 本植わっています。ご注意願います。

９．ねむの里の動物



水源にメダカ、おばばドジョウなどがいます。
人がいないとき、アオサギ、カルガモが来ます。
イタチがよく闊歩しています。
帝京野外活動の時、ウサギが現れました。近所の人の話では、朝早く現れるそうです。
溝の土の中によくイモリがいます。
最近好ましくありませんが、ザリガニがいました。
田植えが終わるころ蛍がでます。夜８時頃です。
時に、蝶々、トンボ、蛾が大発生します。
毎年イナゴが大発生し、お米を相当食べています。

１０．地蔵堂

地蔵堂には、2016 年度にＮＰＯさんさんくらぶが実施した造形ワークショップで、造形作家の田宮義寛先生の指導のもとで作ったお地蔵さんの作品が入っています。
地蔵祭りを開催し、入魂式もやっていますので、田んぼ活動のお守りとなっています。田植えや稲刈りの時に御開帳しています。

１１．子ども達に注意していただきたい事

①水源は、泥で、底が深いですので、子どもが水源で遊ぶ時は、大人一人は必ずついてください。足がとられて事故につながります。
②小さい子どもが見晴らし台に登るときは、大人一人は必ずついてください。反対側斜面は、急で、見えないところで、動けなくなることがあります。
③ねむの里では、火を使うので、火傷にご注意ください。特に帝京大学のブリキの竈や煙突に思わず手など触れて火傷するケースが何度かありました。病院に行くようになります。
④大きな蜂が近づいたら、騒がずゆっくり離れ、皆に静かに連絡しましょう。
⑤草むらで見えない箇所にいきなり近づかないでください。（マムシ注意）

発行：NPO さんさんくらぶ
東京都町田市小野路町 5336-7　　http://www.sansanclub.jp
2020 年８月 作成